

「高知県橋梁会平成 27 年度第 2 回研修会」報告

高知県橋梁会理事 武内 豊

土木学会四国支部と高知県橋梁会の共催による平成 27 年度第 2 回研修会が、去る 2015 年 8 月 24 日(月)に、高知市本町にある高知会館の「飛鳥の間」で開催された。

研修会では、八戸工業大学教授の長谷川明様による「ネットワーク活動と橋梁の津波対策」、神鋼建材工業(株)の仲岡重治様による「防護柵、防災製品」の紹介、(株)第一コンサルタンツの奥村昌史様による「落石防護技術国際シンポジウム参加」報告の 3 テーマの講演を行った。8 月の研修会としては例年より多い 71 名が参加し、有意義な研修会を終えることができた。

■研修会 (13:30~17:00)

研修会に先立ち右城会長より 3 名の講師の紹介があり、台風 15 号の接近による交通機関への影響から、長谷川教授の講演を 3 番目から 1 番目に変更することの案内があった。また、本日の研修会が参加された皆さんの今後の業務に生かせる事を期待するなどの開会の挨拶があった。

(13:30~13:40)



右城会長による開会の挨拶

最初の講演は、八戸工業大学の長谷川明教授から「青い森の橋、ネットワーク活動と橋梁の津波対策」と題し、東日本大震災による橋梁の被害状況と津波対策について詳しい説明があった。

津波により橋梁が流出した気仙大橋(鋼橋)と歌津大橋(PC 橋)について、橋梁に作用する津波の波圧を推定するなど、津波による流出メカニズムの検証、支承部の破損状況の報告などがあった。

津波対策は、地形や形式が異なるため橋梁ごとに検討が必要である、桁高を低くすると安全性が高まる、橋梁の側面にフェアリングを設置すると

効果があるなどの報告があった。

青い森の橋ネットワークは、橋梁の長寿命化に寄与することを目的とした青森県内の産官学が連携した組織である事の紹介があった。

(13:40~15:10)



長谷川教授による講演

2 番目の講演は、神鋼建材工業(株)の仲岡重治氏から「自然環境・景観性に配慮した防護柵及び防災製品の開発」と題し、地山補強土工や津波漂流物の防護柵について概要や施工事例の紹介があった。

ES ネットは、自然斜面や切土法面にロックボルトを打設し、立木を伐採せず ES プレートやケーブルで法面工を形成するなど、自然環境に配慮した地山補強土工であるとの説明があった。

TMS 型防護柵は、トップビームの天端ラインを通して「透過性を向上」させてドライバーの圧迫感を抑制する、ボルト等に丸みのある部材を使用し「親和性を向上」させた防護柵であるとの説明があった。

津波・漂流物防護柵は、透視性に優れた防波板を使用した防護柵で、津波の減衰や漂流物の捕捉の効果に関する水理模型実験、施工事例の紹介があった。(15:20~16:20)



仲岡重治氏による講演

3番目の講演は、(株)第一コンサルタンツの奥村昌史氏から「2015年柔構造落石防護技術国際シンポジウム in 成都に参加して」と題し、中国の成都市で行われた国際会議の報告があった。

国際会議には、中国から北京鉄路局や中鉄の技術者などが約100名、日本から数名が参加し、休憩時間にも質問があるなど、非常に活発な議論があった。日本にない最大落石エネルギーが1万KJの大型落石実験施設において、4tの重錘を落下(1500KJ)させる落石実験を行い成功した。

四川大地震の現地視察では倒壊した中学校がそのまま残されて防災教育に利用されている、北京市内に建設されている橋梁下部工が日本では考えられないような貧弱な構造であったなどの報告があった。(16:20~16:50)



奥村昌史氏による講演



熱心に聴講する参加者



熱心に聴講する参加者



活発に質問する参加者



活発に質問する参加者

予定していた研修プログラムの後、高知県橋梁会も後援している「コンクリートサミット in 高知」の開催について前田会員より案内があり、また、新しく入会された高知県コンクリート製品工業組合の矢野理事長より挨拶をいただいた。



前田会員による研修会の案内



矢野理事長による新規入会の挨拶

最後に、吉田副会長から本日の講師や参加者への謝辞、12月の研修会開催、講演内容の募集の報告等があり、研修会を閉会した。(16:50～16:55)



吉田副会長による閉会の挨拶



司会を担当した武内理事

■懇親会（17：30～19：30）

研修会の後、ザ・クラウンパレス新阪急高知の屋上ビアガーデンに場所を移して懇親会を開催した。

例年、8月の研修会後は講師や理事など15～20名によりビアガーデンで暑気払いを行っていた。今年では会員等にも呼びかけたところ、参加者が50名と多く非常に盛会となった。

懇親会は西川理事の乾杯の音頭で始められ、まだまだ暑さの残る時間帯であったが、ジョッキを片手に談笑しながら親睦を深めた。

